

《心がほのぼのする記事紹介》

第2号でご紹介した、静岡県藤枝市でお茶の無農薬栽培農家を取材した記事の「2回目」です。土の大切さがとてもよくわかりますので、今回もご紹介したいと思います。

**農業の四季**

～瀬戸谷の里から～

<筆者> 杵塚敏明さん  
歩さん

『有機100%の土づくり』

今年は暖冬といわれていますが、冬は冬。私たちのように屋外で仕事をする者にとっては、寒さが身にしみる季節です。

茶園の改植作業をおこなっています。良いお茶を作り続けるためには、20年ごとに茶園を植えかえます。

地表には、霜柱がたち、表土は固く凍っています。ブルドーザーを使い20センチほど掘ると、ふかふかした土が現れます。

本来の生命力をはぐくむこれらの土を、私たち百姓がお茶の木に合った土に作り変えていくのです。

「今日は田んぼ作りだ!」「今日は畑の耕作だ!」、こんな会話が近年聞かれなくなってきました。それに代わって、「今日はお茶の世話だ。米作りだ。レタス作りだ」「肥培管理だ、防除管理だ」と、私がどうも好きになれない言葉が出てくるのです。

まるで「土」の存在を忘れてしまっているかのようにさえ聞こえます。

浄化能力を超える

お茶は芽を生産、加工しますから、肥料は葉を育てるチッソ成分が主体になります。

通常、100キロの芽には最低3キロのチッソが必要と定義づけられているようです。空気中への飛散、土壌から流出する量などを加算すると、その2倍から3倍のチッソ成分を茶畑に入れる計算になります。化学肥料を中心に10アール100キロを補うことになります。

新茶のお知らせ

今年の新茶の発送は、5月半ばころから予定されているそうです。購入をご希望の方は、座禅洞診療所までご連絡下さい。詳しいご案内をお知らせいたします。

自然界には浄化能力があります。しかし、その限界を超えた農用資材の投入は自然破壊につながってしまうのです。

私の住む近くの市では、茶畑から流れ出た硝酸態チッソが原因とみられる水質汚染が大問題になったこともあります。

「昔はあんなに魚がいたのに今では全くなくなってしまった」と、嘆いていた老人の声が忘れられません。



愛馬「コートロー」の馬ふんも土づくりに貢献します。後ろは堆肥(たいひ)舎

愛馬の堆肥還元

化学肥料、除草剤などに頼らずに、無農薬・有機栽培をするということは、いろいろな工夫が必要です。

わが家では家の前を流れる滝沢川で2メートル以上に育った葦(あし)を、年2回刈り取って、雑草押えの役割を期待しながら軽トラック4-5台分を畑に敷き込んでいます。また、平飼養鶏から出る鶏ふんと、愛馬コートローの馬ふんで年間20トンの堆厩(たいきゅう)肥を作り、茶畑に還元しています。

私は2ヘクタールの茶畑耕作をしていますが、葦と堆厩肥だけでは不十分です。不足する成分は、素材を吟味した上で、65%魚粉ミールに加えて、ゴマかす、ナタネかす、草木灰や米ぬかなどを組み合わせ、有機100%の「無農薬茶配合」を作り、補っています。

こうすると、チッソ成分は慣行の半分ほどですが、お茶の芽は立派に育つのです。

「霜かむり」の殻

いまお茶の木は冬眠期に入っています。でも良く見ると、葉の付け根に4ミリほどの「霜かむり」といわれる強い殻に守られた新芽の萌芽(ぼうが)が始まっています。

厳しい寒さに耐えて長い月日をかけて成長するのですから、新茶はうまいのです。これから、堆肥(たいひ)を入れたり、春肥えをまいたりとの仕事が続きます。(敏明)

(赤旗新聞'04.2.12掲載記事より)

Violinist  
**岩切陽子の音楽ひろば**

第2期教室(8月から)のお知らせ

音楽ひろばの「第2期教室(8月から)」を下記の日程で開催の予定です。参加ご希望の方は当研究所までお申し込み下さい。

8月3日(火)・9月7日(火)  
10月5日(火)・11月2日(火)  
12月7日(火)・'05.1月11日(火)

産廃問題勉強会

ごみの山はなぜ出来たのか

講師 石井亨さん/香川県議  
(廃棄物対策手島住民会議代表)

講師 中村梧郎さん/フォトジャーナリスト  
(「母は枯葉剤を浴びた」著者)



石井亨さん



中村梧郎さん

日時: 2004年5月23日(日)  
13時~16時

場所: 岐阜市北部コミュニティセンター  
岐阜市八代1-11-13(tel.058-233-2110)

参加費: 500円

主催: NPO法人 ごみGネット代表 南修治  
連絡先: 事務局 田辺桜子  
tel&fax(0583-84-1710)

石井 亨(とおる) 香川県議会議員

人口わずか1400人の豊島から、人口3万人の大票田小豆島選挙区に立候補。住民の謝罪要求に冷ややかだった自民党2人の無風選挙区で、電撃的な7340票を獲得、1999年4月11日弱冠39歳で香川県議に当選。26年におよぶ豊島産業廃棄物不法投棄事件を、完全撤去・解決に導く上で中心的役割を担った。豊島山頂近くの軒家で二人暮らし、農業を営む母が選挙戦に送り出したときの言葉。「誰かが出ないと、何も変わらない、お前が行って死んでこい(大川真郎著「豊島産業廃棄物不法投棄事件」日本評論社)」。

中村梧郎(ごろう) フォト・ジャーナリスト

ベトナム・ドクちゃんを撮った戦場のカメラマンとして広く知られる。猛毒・ダイオキシンを使ったアメリカ軍の無差別攻撃を、30年以上にわたって被害の側から取材。日本・ベトナム・韓国・アメリカなど各地で写真展開催。「戦場の枯葉剤」(岩波書店)で、日本ジャーナリスト特別賞。一方御嵩町長襲撃事件を含め産業廃棄物の現場から、日本列島ダイオキシン汚染に警鐘。5年来岐阜大学地域科学部に在籍、ジャーナリストのあり方を論じるゼミは学生に人気。退職後も岐阜市産業廃棄物不法投棄事件を追跡中。